

深江の過去と現在の景観をめぐる

「古写真からたどる深江」展の内容紹介

神戸大学文学部准教授 菊地 真

はじめに

平成三〇（二〇一八）年度、神戸大学海事博物館において、企画展「古写真からたどる深江」を開催した。海事博物館は海や船に関する展示を行っているが、今回は大学のある地元、深江地区を取り上げた。『本庄村史』などを手掛かりに、古写真や地図を片手に街なかを歩き、過去と現在を対比させ、思考を巡らせた。（ここでは展示概要を紹介し、学生たちと見出した深江の景観の一端をご紹介したい。）

深江という場所——土地の履歴と景観からの思考

近世にあつた深江村は、明治の市制町村制によって西青木村、青木村と合併し、本庄村が誕生したのは、周知の通りである。それまでの農村が次第に住宅や工場が立ち並ぶ、阪神間の都市域へと変貌していった。大正期には川崎商船学校が設立され、以後、神戸高等商船学校、戦後の神戸商船大学、そして現在にいたるまで、海技者を目指す多くの若者も集うようになつた。

戦後は戦災復興のなか、神戸市に合併して神戸市東灘区の一部となつた。神戸市の東部海浜埋立事業で誕生した埋立地は、深江に漁業の終焉をもたらしたが、臨海工業都市としての新たな立ち位置を与えていく。埋立地である御影・魚崎・深江の浜町は、各種工場あるいは物流センターが立ち並び、深江浜町には神戸市東部中央卸売市場も置かれている。これらの工場等では、外国人労働者が多く雇用されており、深江一帯は外国人の町という、新たな側面も見せていく。



写真1 区画整理前の八坂神社(昭和38年)『本庄村史』より

深江という場所は、深江村や本庄村という近世・近代の土地と居住者のコミュニティによって形成されたが、阪神・淡路大震災から二四年が経過し、古くからの住民に加え、ここ二〇年来に移り住んできた新しい住民、外国からの移民、学生・留学生などなど、多種多様な人々によって、新たな地域コミュニティが創出されている。阪神線の高架化工事も進む現在、深江は以前と異なる風景へと変わりつつある。

受け継がれる神社と景観

本庄村を構成した、かつての西青木村・青木村・深江村には、春日

神社・八坂神社、大日靈女神神社が古くから祀られてきた。深江一帯が時代と共に大きく変貌するなかで、神社は場所を変えず、に今もたたずんでいる。

春日神社は天上川沿いに位置する。一九三八（昭和十三）年の阪神大水害の記念碑を境内に残し、社殿も阪神・淡路大震災で被災を受け、神戸の二つの自然災害の記憶をたどれる場ともなっている。近隣に地蔵講の地蔵が大切に祀られているのも、ここに住む方々の信仰や旧来か



図1 旧日本庄村の神社（明治44年発行の地形図による）阪神深江駅前に大日靈女神社が見える。深江の集落は浜街道沿いと海浜部にそれぞれ広がる。青木、西青木の各集落の北寄りに、八坂神社、春日神社が位置する。

らの生活をうかがわせる。
八坂神社は、国道四三号線・阪神高速の開通によつて、バイパス道路の目の前に鳥居を構えるが、鳥居から南をよく見れば、深江浜を向いているのが良くわかる。かつて魚などが水揚げされ、戦後は東神戸フェリー埠頭として、四国や九州方面への船着き場としてにぎわつた沿岸は、現在はサンシャインワーフというショッピングセンターとなつてゐる。八坂神社裏には青木の地区会館が隣接するが、神社と会館の間に、実はもう一つ、渋い赤色の火の見櫓が立つてゐる。一九六三（昭和三八）年の写真に写つており、五〇年以上も、神社とともに青木を見守つて來た。

大日靈女神社は大日如来を軸とした神社である。阪神深江駅前の社殿はひときわ目立つ存在だが、深江の旧集落は神社東側に広がつておる、今の駅前は村はずれであったと知る人は、どれだけいるだろうか。

五月に深江でも曳きまわされるだん

じりは、最近は子供や女性の曳き手でも知られる。元

來、甲南山手駅の北側にある森稻荷神社の例大祭であ

るが、この稻荷神

は、昔は深江村の氏神であり、森稻荷神社の御幣が洪水で深江浜に流れ着いた際、氏子たちが浜の松並木のところで踊つたと伝えられる。説話が甲南山手から深江までの場をつなぎ合わせてゐる点が興味深い。この言い伝えを残すのが、神戸大学海事科学部の敷地端に立つ、踊り松の碑である。

戦前は立派な松が生い茂り、深江・青木・西青木の集落をつなぐ浜街道に沿つて松並木をなしてゐたが、現在は後に植えられた本庄小学校の数本の松と、石碑とが往時を伝えている。

町は明治から平成と変化してきたが、神社の景観はさほど大きく変わっていない。各神社は信仰の場として、あるいは祭りなどの地域行事で人々が交流する場として維持・継承され続けており、住民たちを繋ぎ合わせるという重要な機能を果たしてゐる。この側面を、大日靈女神社の例から見てみたい。

大日靈女神社と人びとの関わり

深江では、さまざまな神が信仰されていた。明治以降の都市化でその場を失つた神社や祠は現在、多くが大日靈女神社に集められている。神々と、年中行事、深江地域の民俗性（ここでは神々や行事に結びついている信仰の性格、あるいは生業の特徴といつ



写真2 踊り松 神戸高等商船学校敷地内、奥に見えるのは金毘羅宮

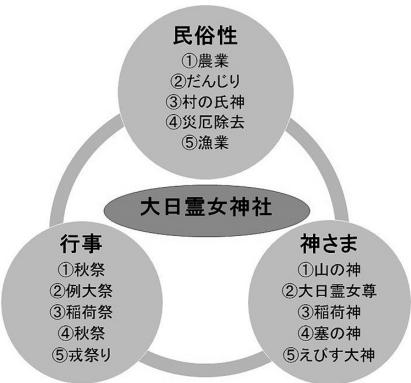


図2 大日靈女神社に集められている神々と深江とのつながり



現在、大日靈女神社の敷地脇に立てられた魚屋道の石碑は、深江と近郊地

記念碑・石碑などの石造物までもが、「深江史の庭」として神社の一角に集められ、現在の大日靈女神社の境内には、非常に賑やかである。この背景には、大日靈女神社が「大日ツアン」と親しみを込めて呼ばれ、深江の人びとの心の拠り所となってきた歴史がある。大日靈女神社と人びとの長い関係性が、神々の集う場という、現在の新たな役割を支えていると言えよう。

山の神（大山祇大神）は、深江と有馬をつなぐ生活道路であった魚屋道沿いの山中に祀られていた。稻荷神は森稻荷神社の神のほか、踊り松のたもとに祀られていた白玉稻荷神社も合祀されている。ほかに塞の神や、漁師が信仰していた戎大神もある。神々だけでなく、道標・

た意味）という三つの観点から考えると、深江の住民たちの生活サイクルと行事が密接に結びつき、信仰のカタチが次代へとつながれてきたのが分かる。

域をつないできた、道の役割の変化を教えてくれる。

魚屋道は、江戸時代から灘と、温泉地で有名な有馬を結んできた、東六甲の山越えルートの一つである。江戸時代はいわば抜け道として使われ、それゆえに周辺の宿場などと争論になることもあった。明治時代になると往来が自由となり、深江浜の新鮮な魚を有馬に運ぶようになったため、魚屋道と呼ばれたと言われる。けれども明治以降は同時に、鉄道との競争を強いられた。

はじめは明治二〇（一八八七）年の国鉄住吉駅設置である。有馬へ向かう旅人は住吉駅から北上し、七曲り入口から魚屋道へと合流した。次の変化は、明治三三（一八九九）年の阪鶴鉄道である。神崎・福知山間に開通したこの路線に生瀬駅、三田駅が設けられた。生瀬は古来、道を利用した有馬へのアクセス性の向上は、旅客を減じさせる元となっ

た。次いで大正四（一九一五）年

に有馬軽便鉄道、昭和三（一九二八）年に神戸電鉄三田線、有馬線が開通する。三田あるいは神戸経由で有馬へ向かう鉄道ルートが整備された結果、有馬への旅客をはじめとした輸送の便は、鉄道が主体となっていました。そして魚屋道は、徐々に忘れられた道となつていった。

交通路として、一度はその役割を終えた魚屋道だが、しかし現在は再び、登山道として利用されている。神戸市による昭和四八（一九



図3 戦前における深江の景観変化
上は昭和7(1932)年、下は昭和24(1949)年の地図。次第に耕地が減少し、工場や宅地が増加しているのが読み取れる。



写真4 戦前の深江
正面が神戸高等商船学校。まだ川西航空機の工場が建設されていない。

(三) 年の自然歩道、「太陽と緑の道プロジェクト」によって、魚屋道もハイキングコースとして見直されてきた。当時は、戦後の四大公害に代表される環境悪化のなか、自然を見直し、自然に親しむ自然歩道が、環境保護・自然保護思想の高まりの中、広く受け入れられた。神戸市の太陽と緑の道や、兵庫県にもまたがる近畿自然歩道などがある。このように現在でも、魚屋道は役割を変えながら、人びとに利用され、記憶されている。

戦前の深江・村から都市へ

最後に、近代の深江の景観変化について触れておきたい。大正・昭和初期にかけて、深江一帯は、「村」から「都市」へと変わつて来

た。

昭和九（一九三四）年、室戸台風が本庄村を襲つた。耕地も多くが高潮などの被害を受けたが、地主は耕地を復旧させずに、土地を転売することで利潤の追求を図り、小作争議が昭和一八年ごろまで頻繁に起ることとなつた。深江には次第に、住宅地や工場が数を増し、神戸近郊の都市域としての様相を強めていった。深江から隣の芦屋にかけては、大正時代につくられた深江文化村など、洋風の住宅も海滨部に立ち並んでいたが、郊外住宅地としての景観がより強まつていった。なお昭和二四（一九四九）年の地図では、川西航空機の工場が特に目立つてゐる。

おわりに

展示では、生活文化史料館が所蔵する貴重な写真を借用させて頂いた。大国館長ほか、皆さまのご厚意に感謝申し上げたい。今回は地元の資料が豊富で、過去と現在の对比も容易だつた。一方で近年の様子について情報が少ない分、現在の景観とその背景について自分たちで学び、考察する機会となつた点が良かったと感じている。神戸大学海

事科学部は、前身の商船大学時代から、地元との繋がりは強いが、海事博物館としてこれまで、活動協力することは少なかつたかと思う。これを機会に深江、あるいは生活文化史料館との結びつきをさらに強めなければ、望外の喜びである。

(注)

- 1 展示は本学学生を中心に構築したものである。本文も学生たちの成果に多くを依つていていることを付記する。
- 2 近年の外国人増加の様相については、西堀による別稿を参照されたい。